Living the Lotus 4

2024

VOL. 223

Buddhism in Everyday Life

立正佼成会
バングラデシュ教会

Living the Lotus
Vol. 223 (April 2024)

【発行】立正佼成会 国際伝道部
〒166-8537
東京都杉並区和田2-7-1 普門メディアセンター3F
Tel: 03-5341-1124　Fax: 03-5341-1224
E-mail: iiving.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp
編集責任者: 赤川 惠一
編集チーフ: 三川 紗知
校閲者: 小坂 和正、菊池 克之
編集スタッフ: 国際伝道部スタッフ

立正佼成会は1938年に庭野日敬開祖、長沼妙佼脇祖によって創立された、法華三部経を所依の経典とする在家仏教教団です。家庭や職場、地域社会の中で釈尊の教えを生かし、平和な世界を築いていきたいと願う人々の集まりです。現在は庭野日鑛会長とともに、私たち会員は仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいます。

Living the Lotus—Buddhism in Everyday Life（法華経を生きる～生活の中の仏教）というタイトルには、日々の生活のなかに法華経の教えを活かして、泥水に咲く美しい蓮の花のように、人生を豊かに、そしてより価値あるものにしていきたいとの願いが込められています。本誌を通じて、世界中の人々に日々の生活のなかで活かす仏教の教えをお伝えします。

会長法話

「あるがまま」を受け入れる

庭野日鑛
立正佼成会会長

「真実」とは何か

「石ばしる垂水の上のさ蕨の　萌え出づる春になりにけるかも」――岩間を激しく流れ落ちる滝の水際に、芽が出たばかりの蕨をみつけた志貴皇子（天智天皇の第七皇子）による、春の訪れを懽ぶ歌です。奈良時代に編まれた『万葉集』の一首ですが、後世の私たちにも「春がきたなあ」と心浮き立つ気分が伝わってくる、すばらしい和歌です。

ただ、万葉人のように澄んだ目で自然を愛でたり、ものごとのあるがままを感謝と喜びで受けとめたりすることが、いまの私たちにはなかなかできません。こうした歌は、私たちに自らの心の曇りや至らなさを教えてもくれます。

ところで、古い経典に残されている釈尊とバラモンとの会話のなかに、「真実を守ることは私の草刈りである」というお言葉があります。釈尊にとって「真実を守ること」が、田畑を耕作する人の草刈りと同じだというのです。

では、その「真実」とは何をさすのでしょう。そして、それを「守る」とはどういうことなのでしょうか。

「真実」と聞いて、まず思いつくのは「真理」のことです。仏教は、一人ひとりが真理を自覚することを大事にしますから、「真実を守る」とは、真理に随って生きることと受けとることができます。ただ、仏教辞典の「真実」には、「ありのままのすがた」「あるがまま」という説明がついています。そのことからすると、ものごとの「ありのままのすがた」を好き嫌いなどの感情をまじえずに見て、その「あるがまま」を受け入れることが「真実を守る」ことで、それを妨げる煩悩という雑草が心にはびこることがないよう、釈尊もつとめておられたと拝察するのです。

雑草という名の草はない

とはいえ、煩悩は進歩や向上の原動力にもなり、「煩悩即菩提」と説くように、煩悩と菩提とが究極は一つであるといえます。人間は、大煩悩の持ち主だからこそ、真理を自覚できる力を授かっているのだとなれば、煩悩は私たちを生かし、育てるありがたいものとなります。大きな煩悩を具えている人ほど、大きな心の転換に至るかもしれないのです。釈尊が、ここで「草刈り」と表現されたのは、油断をすると心に生い茂る煩悩という雑草も、伸びすぎないように適宜刈りとり、そのつど心の土壌に鋤きこめば、それが心の幅を広げて智慧を生む栄養となり、いっそう地味豊かで柔らかな心田になるからでありましょう。

雑草ということでいえば、植物分類学者の牧野富太郎氏が、「雑草」と口走った記者に「世の中に雑草という草はない。どんな草にだって、ちゃんと名前がついている」と注意した話がよく知られています。それに重ねると、本稿で心の雑草になぞらえてきた煩悩一つ一つにも、意味や価値があるわけです。煩悩を煩悩のままで終わらせるのか、心の成長につなげるかは私たち自身にかかっているのです。

さて、今年の元日、能登半島において甚大な被害を生む地震が発生しました。私たちにとっては災厄そのものの地震ですが、しかし地球の歴史に照らせば、現在も活動しつづけている自然現象の一つです。その事実をあるがまま直視することも、災厄を人類の叡智へとつなげる大切な過程ともいえます。もちろん被災した方の過酷な状況を見て、なんの感情もさしはさまずに現実を受けとめることはできません。亡くなった方々を悼み、生活が困難な人を思いやらずにはいられません。

私たちは、真実と向きあい、受け入れ、さまざまな感情が交錯して悩み苦しむなかで、よりよく生きる智慧と、人を思いやる慈悲の心をはぐくんでいきます。それが、生涯の仏道精進といえるのです。

（『佼成』2024年4月号）

Interview

人の痛みに共感し、心配りができる人間に

韓国立正佼成会　崔 友紀（チェ・ウギ）

いつ頃から、何がきっかけで教会活動に参加するようになったのですか？

立正佼成会には母が1989年に入会し、私は信仰2代目です。母と一緒に初めて道場に参拝したのは私が中学生の時でした。その後、私は就職し、結婚、出産、育児などに追われていて、教会で大きな行事が行なわれる時だけは道場に行っていました。

そして2022年8月から少しずつ教会に行くようになったのですが、そのきっかけは2018年頃から、仲の良かった友だちのAさんとの人間関係がギクシャクし始めたことからでした。私はそれまでAさんを信頼して、本心を何でも打ち明けて話をしていたのですが、ある時とても裏切られたような出来事があったのです。

そのことにショックを受けた私は、教会で自分の心を見つめるために法座修行やご命日に参加するようになったのです。当時は、そのAさんとの人間関係の悩みを幹部さんに結んでもらうことはありませんでした。でも、今は教えのお陰さまで、Aさんを責める心はなくなり、Aさんの幸せを祈ることができるようになりました。

現在、組長のお役をされていますが、すぐにお役を受けたのですか？

先ほど2022年8月から教会に出始めたと言いましたが、その頃、私はまだ仕事をしていて、週末だけ道場に行くという状況でした。そして2023年の年末から仕事を辞め、今

真剣に法を求め、法座修行に取り組む崔さん

インタビューに答える崔友紀さん

は主婦と組長のお役に集中できるようになりました。わが家は現在、夫と私、長女、長男の4人家族です。二人の子どもは共に大学生に成長し、もうあまり手がかからなくなりました。ですから仕事の心配もなく、家庭での状況も自然と環境が整い、お役に専心できるようになったと感じています。まさに仏さまのお手配だと思って、組長のお役を素直に感謝と喜びで受けさせていただきました。

どんな時にお役の喜びを感じますか？

組長のお役をいただく前の私は、どちらかと言うと、道場で健幸行をさせていただいても受け身な姿勢で取り組む自分でしたが、2023年8月1日に組長の辞令をいただいてからは主体的にお役に励むようになり、支部の中でも積極的に発言できるようになったんです。誰か私の後ろ姿を見て学ぼうとする人がいるかもしれないと思いながら、組長のお役に最善を尽くして努めたいと思っております。この気持ちを使命感と言っていいのかよくわかりませんが、私はお役の功徳だと受けとめています。

手どりやお導きをとおして、気づいたことや学んだことを教えてください。

現在、私には親しくしている友だちが二人いまして、そのうちのBさんは、私が2022年8月から教会に出始めた頃、教会にお誘いした友だちで寒修行にも参加してくれました。

その後、Bさんをお導きし、有り難いことに9月に私と一緒に額装御本尊を教会勧請させていただくことができたのです。

もう一人の友だちのCさんは、地域のバトミントン運動クラブで知り合った人でした。私は、Cさんをぜひお導きしたいという願いを持って、教会にCさんをお誘いして一度は来てくれたのです。ところが、私が何とか入会させたいという思いがあまりにも強すぎて、Cさんに対する心配りが足りなかったことが原因で次第に教会から遠ざかってしまったのです。今はCさんには本当に申し訳ないことをしたと反省しています。私はこの体験をとおして、相手の心に寄り添い、親身になって話を聞くことの大切さを学びました。

研修会や法座修行などで印象に残っている言葉はありますか？

私が教会に出始めた頃、「自分が変われば相手が変わる」という言葉がとても印象的で、今も心に刻んでいます。以前の私はつい「相手を変えたい」という思いが強かったと思います。でも、考えてみれば自分は変えられるけれど、相手は変えられないわけです。だからこそ、相手を変えようとするのではなく、自分の見方や考え方、行動を変える努力が大切なんですね。本当に自分が変われているなら、見える景色や考え方もプラスに変わっていくことを教えていただきました。

教会の式典で太鼓のお役を務める崔さん

ご家族といっしょに

立正佼成会の魅力はどういうところだと思いますか？

韓国の多くの伝統仏教では、各寺院の住職が読経や説法を行ない、信者は五体投地の拝礼をします。それらはとても尊いことだとは思いますが、立正佼成会では朝夕自らがご供養を行ない、法座修行や健幸行に参加し、お導きや手どりなどの布教活動もできるわけです。そのようにすべての修行や活動に自ら参加し、実践できるところが最大の魅力だと思っています。

目標としているリーダー、幹部さんはどのような人ですか？

私が最も敬愛し、目標としているのは李幸子教会長さんです。李教会長さんは、いつも仏さまの真理に基づき、開祖さま、会長先生の教えを正確に伝えることに力を注がれ、同時に私たち会員が理解できるようなわかりやすいお話をしてくださいます。理想はとても大きく高いのですが、私は李教会長さんのような幹部さんになりたいと思っています。

これからの願いや具体的な目標を聞かせてください。

2023年を振り返ると、活動し始めた私を教会や支部の皆さんに知ってもらい、私という人間をアピールした年だったと思います。2024年は、それにプラスして信仰者としてもう一歩成長できる自分になりたいと願っています。具体的な目標としては、まだまだ至らない私ですが、今年は主任のお役を頂けるようさらに精進していきたいと思います。

そのためには目配り・気配り・心配りを大事にして、人さまの痛みに共感できる、そして人さまに対して思いやりの心を働かせられる人間に成長できるよう努力していきたいと思います。また、家庭での教えの実践はなかなか難しいのですが、教会で学んだことを一つでも二つでも家庭の中で実践できるような妻であり、母でありたいと思っています。

まんが立正佼成会入門

会員になったら

ご本尊の勧請

一般に仏壇と呼ばれるものを、立正佼成会では「ご宝前」といいます。会員になったら、そのご宝前にご本尊（久遠実成大恩教主釈迦牟尼世尊）・ご法号（開祖さまと脇祖さまのご尊称）・総戒名（会員のご先祖さまをお祀りする戒名）・宅地因縁戒名（宅地にまつわる諸精霊への供養）をお迎えし、謹んで安置します。このことを勧請といいます。

勧請の時は、いっしょに修行する会員たちが集まって読経供養を行い、みんなで教えを実践していくことを誓います。

豆知識

「南無妙法蓮華経」と、毎日唱えるお題目。「南無」は「信じます」という意味。「妙法蓮華経」は『法華経』の正式な名前。したがって南無妙法蓮華経は、『法華経』の教えを心から信じ実践します、という意味だ。

※私的使用を除き、無断で複製・転載をしないでください。

『まんが立正佼成会入門』は、佼成ショップにて好評発売中です。
https://www.koseishop.com/

ご宝前

各家庭のご宝前には、ご本尊さまやご法号、総戒名・宅地因縁戒名を勧請（真心をもってお迎えすること）します。

ご宝前には仏さまやご先祖さまのために心をこめて花や水、お茶、ご飯などをお供えします。

また、一日のはじまりを感謝し、よいことをさせていただきたいと願い、行いを反省するところでもあります。朝は感謝の気持ちで手を合わせ、学校から帰って一日の行いを報告すると、仏さまやご先祖さまは喜んでくれるでしょう。

※私的使用を除き、無断で複製・転載をしないでください。

お役のある人

仏の子としてのお役

立正佼成会開祖　庭野日敬

立正佼成会では「お役」ということを非常に大切にしています。「あの人はお役のある人だ」とか「あなたにはお役があるんですよ」という言葉が、よく聞かれます。

その「お役」とは、支部長や主任という役柄のことだけでなく、会員のみなさんすべてが大事な「お役」、つまり使命をもっている、ということです。それは、私たちが帰依する法華経の教えをかみしめると、おのずとわかるはずです。

まず第一に、「方便品」に、仏さまは「一大事の因縁」をもってこの世にお出ましになった、と説かれています。その「一大事の因縁」というのは、すべての人びとを仏道に入らせ、仏と等しい境地に導きたい、という大きな願いです。会員のみなさんはすでに、その仏さまの「一大事の因縁」と直接かかわっているわけですから、みなさんに共通の「お役」といえば、仏さまの子として、仏さまのお使いとして、一人でも多くの人を仏道に導くことに尽きるでしょう。

そうした基本的な「お役」のほかに、教会内のさまざまな「お役」もあります。その大切さも、法華経の教えを考えてみるとよくわかるはずです。そこで、法華経の教えの要点をまとめてみますと…。

1　この世のすべての存在は、「久遠実成の本仏」に生かされている。

2　だから、すべての存在は本質的に平等であり、現象上ではさまざまに違った役目をもっているが、その役目をしっかり果たすところに、それぞれの成仏がある。

3　この世界はすべての存在の共同体であり、すべての存在が協力し合うのが真実のあり方である。そして、その協力が完全に果たされるところに理想社会（常寂光土）の建設が達成される。

この三つのことを見直してみれば、どのような「お役」でも、その大切さがわかってくるものと思います。

庭野日敬平成法話集 1『菩提の萌を発さしむ』, P.48-50

Director's Column

この広い空の下で、喜びを届けられる人に

国際伝道部長
赤川惠一

みなさん、こんにちは。今年も春爛漫の季節が巡ってまいりました。4月8日には「降誕会」を迎えます。お釈迦さまのご生誕をお祝いさせていただきましょう。

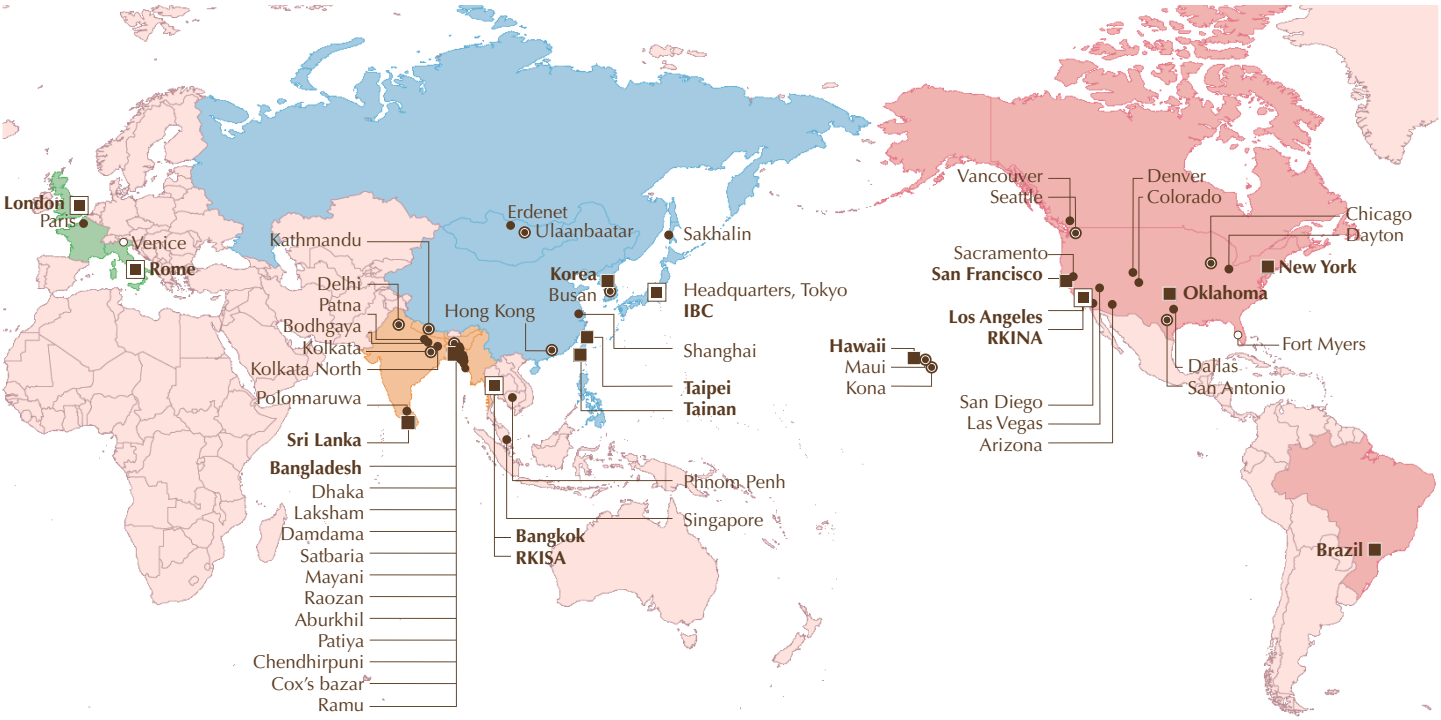
さて、春の陽気に浮かれて気もそぞろになっていたのでしょうか、先日私は大失敗をしてしまいました。職場のビルに入館するためのカードキーと職員証の入った大切なパスケースを通勤途中に紛失してしまったのです。どこを確認しても見当たりません。どこで落としたのか見当もつかず、もう手元には戻ってこないだろうと悲観的な思いに駆られました。しかし、諦め半分で駅の遺失物相談窓口に電話をしてみると、なんと、紛失してから約4時間しか経っていないにもかかわらず、都内の駅の事務所に、すでに親切な方が届けてくださっていたことが分かったのです。自分の不注意を悔やんで落ち込んでいた私でしたが、確実に手元に戻ってくると分かった瞬間に目の前が明るく輝きだしました。見ず知らずの方からの温かな思いやりに助けられて、私の心は唯々感謝でいっぱいでした。この小さな苦い経験は、私を助けてくださった方のように、私もこの広い空の下で、人さまに安心と喜びを届けられる人でありたいと強く感じさせてくれました。

2024年2月25日、台北教会の会員とともに（前列中央が赤川部長）

Rissho Kosei-kai International

Make Every Encounter Matter

A Global Buddhist Movement



Information about local Dharma centers

facebook

twitter

We welcome comments on our newsletter Living the Lotus: living.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp